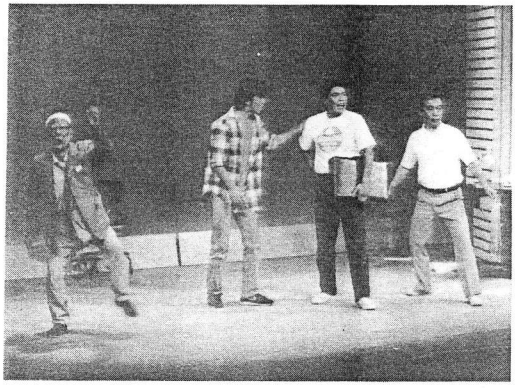
文化協会設立10周年に寄せて

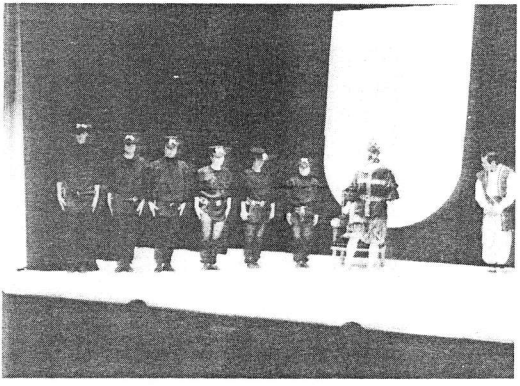
劇団「むさしの座」 広石幸弘

早いもので「むさしの座」は、この武蔵村山市でもう14年間も芝居を演ってきた。最初はひょんな事から始まった。49年夏、当市商工会青年部で秋の産業祭に何らかの形で参加しようということからお芝居はどうだという話が持ち上がった。たまたま私は20才の頃九州より上京し池袋にある「舞台芸術学院」で新劇の役者としての訓練を受け、その後30才過ぎまでいくつかの劇団を経て多分にもれず食えないので看板屋を営なみ市商工会に加入していました。素人でも必死になって演ずればプロ以上の舞台が作れるという信念を持っていた私は手心を加えず役者達を追いつめた。役を演ずる事は結構苦しいものである。役者は恥も外聞も自尊心までも捨ててその役に没頭しなければならない。これが非常にむずかしい。時にはケンカにさえなる事もある、しかし熱い中での努力が実って迫力のある舞台に観客はおしみない拍手を送って下さった。その時の出し物は木下順二作「赤い陣羽織」だった。むちゃな代官が百姓の女房に横恋慕するがかしこい庶民に負けてしまう話である。味をしめた訳でもないが毎年やろうという事になり、商工会の有志と一般公募で様々な職業の人が集まってきて約15名でそれ以来人の入れ替わりはあるが続いている訳である。55年の「夕鶴」では私が与ひょう役を演じ、昭島の友人桐原博氏に演出をやっていただき、

この公演は八王子の小学校からお呼びがかかり出張公演もした。他に幼稚園や病院、諸団体の要請に応じ大変ながら結構楽しかった。58年からは春の文化協会祭が始まり秋の市民文化祭との年２回公演となり、それぞれ２晩公演となり市民会館小ホールを満席にしている。嬉しいのは毎年観てくれる常連が多数いることだ。手を引かれてくる小さい子供達が次の年にはファンになってきてくれる。最初は観劇マナーもメチャクチャだったが毎年続けていると立派なもので盛り上がる処では拍手をくれ舞台と客席が一体となって芝居も良くなっていく。いつかの公演の時「菅家議員」が終演後舞台からのあいさつで「文化文化というけれど、皆さんが今この舞台を観たこと、感じたこと、そして今、拍手を送った

事、それが文化なんですよ」と言って下さった事が心に残っている。テレビが茶の間を占拠して以来商品のコマーシャルの間に見たくもないシーンが暴力的に視界にとび込んでくる中で子供達は美しいものに対する感覚がマヒされていくといっても過言ではあるまい。こういう現代で育つ子供達が大人になった社





会はどうなっていくのか。少しでも人間的に愛の大切さが分かる人になって貰いたいとの願いを込めてささやかながら「むさしの座」はこれからも舞台を続けていこうと座員一同決意している次第です。

〔劇団「むさしの座」の歩み〕

49年　「赤い陣羽織」木下順二作
50年　「殿さまとまんじゅう」作者不詳
51年　「三匹の子ぶた」
52年　「まつかつかの長者」生越嘉治作
53年　「北風のくれたテーブルかけ」
　　久保田万太郎作
54年　「オニは誰だ」林昌次作
　　人形劇「ひょうたん童子」
55年　「夕鶴」木下順二作
56年　「彦一ばなし」木下順二作
57年　「王様は魔法がお好き」飯沢匡作
58年　「お化けリンゴ」谷川俊太郎作
59年　「猿の手」W・Wジェーコブス作
60年　「よくある脱走」上園利康作
60年　「こうして豆は考えました」久保田万太郎作
61年　「袋の女」榊原政常作
　　「仙人のくれた不思議なずきん」
　　小松幹生作
62年　「探偵小説」松本和子作
　　「シェンテとシュイタ」ブレヒメ作

〔むさしの座連名〕

演出部　桐原博　内野辰美　比留間厚一
　　石川進一郎　広石康子
演技部　広石幸弘　小間三良　上田雅夫
　　久保田国夫　比留間豊　小口昌男
　　広石一人　横山大輔　梶文子
　　沢野和子　松浦幸子　木下ゆみ
　　高橋光香　藤本恵美子　村松由起美
　　吉田美幸　小川結加